

知識を与える前後での脳死問題に対する意見の変化

松尾 香弥子
(お茶の水女子大学)

【研究の目的】

脳死・臓器移植問題について、一般の大学生には必ずしも理解が広まっていないことが、前回の調査(昨年度本総会にて一部発表)で示唆された。そこで、知識を与えた場合、この問題に対する意見が変化する可能性がある。本研究ではこのような意見の変化の可能性について予備的に調査した。本稿では (1)この問題に関するごく簡単な知識(今回は脳死状態についてのみ)を与えた場合、意見の変化が見られるか (2)意見の変化があるとするれば、どのような変化であるか (3)意見の変化がある場合、それはどういった理由からと考えられるか について考察する。

【方法】

<被調査者>首都圏のある大学の大学生105名
(男性57名、女性48名、昨年度本総会発表の被調査者と同一母集団)
<実施年月>1995年1月
<質問紙の構成>①脳死を人の死とすること・臓器移植についての意見(各々3件法) ②その理由(「脳死体は人間らしい存在ではない」などの短文計20につき、各々「全く思わない」から「とても思う」までの7段階スケールにて評定) ③脳死状態に関して記述した短文6つ(「脳死状態の人に触れると温かい」など)につき、正誤を選択(全員が回答を終えた後、調査者が正解を確認する) ④正解を聞いて意見が変化したか ⑤変化した場合どのように変化したか

【結果】

(1)意見の変化:脳死状態について簡単な知識を与えた後意見が「変わった」と回答した者は、この部分を回答した102名のうち15名(14.7%)であった。このうち、「変わった」としながら①と⑤の評定で意見の変化の見られない者が2名いた。
(2)意見の変化の方向:上の(1)の15名について、脳死についての意見の変化を表1に、臓器移植についての意見の変化を表2に示す。これを見ると、臓器移植についての意見よりも脳死についての意見に変化が見られ、表1の1→3、3→2の方向の変化が多いようである($\chi^2=5.174, p=.27$)。

表1 脳死についての意見の変化(人)

	1	2	3	
1	0	0	4	1賛成
2	0	1	1	2反対
3	1	5	3	3どちらとも言えない

表2 臓器移植についての意見の変化(人)

	1	2	3	
1	4	1	1	1推進派
2	0	5	1	2慎重派
3	1	0	2	3どちらとも言えない

(3)変化の理由:質問紙②の評定を因子分析した結果、因子1:社会的推進の理由 因子2:慎重・否定的理由 因子3:付随する問題を懸念する理由 の3つの因子が見出された。各々の因子スコアによって分散分析した結果、意見が「変わった」とそうでない者との間に、慎重・否定的理由において有意差($p<.01$)が見られ、意見が「変わった」者の値が大きい、という結果である。

【考察】

脳死状態についてのごく簡単な知識を与えただけで、1割以上の大学生に意見の変化が見られ、脳死を人の死と認めることに対し、より慎重な方向へと変化する傾向がある。変化の見られた者は、「他の機能が停止していない以上、死とは言えない」「自分の家族・身内が脳死とされても納得できない」などの項目を含む「慎重・否定的理由」の因子スコアが高い。臓器移植にまつわる医学上・人権上の問題などについて知識を与えた場合にはさらに意見の変化が見られる可能性がある。一般にこの問題については、問題点を知るほど慎重になる、と言われることがあるが、本研究によりそのことが一部ではあるが示されたと考えられる。

「脳死」について反対・どちらとも言えないとしながら、「臓器移植」について賛成としている者が全体で26.7%見られたことから推測されるように、心臓・肝臓などの移植をする場合には脳死状態で摘出を行わなければならないことを理解していない者が多いようである。今後さらに正しい啓蒙の必要があると考えられる。